初公開の会津八一宛 片上伸・天弦書簡

金子善八郎

一、

このほど、木村秋雨資料の中に未公開の片上伸・天弦の会津八一宛書簡のあることが分かった。

書簡は明治四十一年（一九〇八）十月二十一日付で、封書・巻紙・墨書。東京牛込の佐々木方から、新潟県中頸城針村　会津八一に宛てたものである。

片上伸・天弦は明治十七年生れ、愛媛県の出身。相馬御風や会津八一などと早稲田大学の同期卒。卒業と同時に明治三十九年、御風と共に第二期早稲田文学の編集部、早稲田文学社に入った。書簡はこの時代のものである。

新潟県中頸城郡、針村にいた会津八一は、自分が発見し、校訂した「一茶六番日記」の原稿を東京の出版社から出版する為に、俳人の高浜虚子に送り、友人の片上伸・天弦にもその斡旋を頼んだ。この書簡は、その返信が遅くなったことを詫びるものである。

まず返信の遅れた理由として「虚子氏神経衰弱ニて旅行中」であったためと、自分の妹が病気になったため、虚子とよく「懇話」できなかったことを挙げている。

そこで、「手紙で通じ置き今晩虚子が国民社から帰るのを待受け久し振りで会った」。その結果、俳画堂からの出版は「多分」大丈夫で、俳画堂がだめでも、他の「本屋」から出せるから、次の二点を聞きたい、と。

(一)一茶の日記は原稿用紙にして何枚位になるのか。

(二)出版したい本の紙質、表紙の装飾、版型体裁などは。

以上、至急知らせてほしい。その上で虚子から本屋へ話しをしてもらう。話は成立するものと信じている、と。

書簡はまた、「赤城神社内」に転居したこと、ひげをたくわえはじめたこと、を伝えている。

そして、「新潟大火大兄の家ハ如何なりしや」とある。

二、

この書簡に関係する三人、片上伸・天弦、会津八一、そして相馬御風は、相互に友人関係にあった。

まず御風と伸の関係。二人は長く早稲田文学の編集部にいた同僚。大正四年（一九一五）、天弦はロシアへ留学、その一年後、御風は糸魚川へ退住する。その時のことを、作家正宗白鳥は、『文壇五十年』（昭和30・10・「河出書房」）の「不可解な相馬御風の帰郷」で次のように述べている。

早稲田出身の有望な秀才として内外から注目されていた青年は、片上伸、吉江喬松、相馬御風の三人であった。年令もほぼ同じく、暗々裡に出世争いをしているらしかった。それで、片上はロシアへ、吉江はフランスへ、万障を排して文学修行の途についたのであった。彼等が世界的進出を志していたのに反し、相馬は東京にも見切りをつけて、故郷の、北陸の糸魚川に隠退する決心をしたのであった。

八一と御風とのことはよく知られている。ここでは友人、伊達俊光宛、八一書簡『会津八一書簡集』植田重雄（平成三・一・十五・恒文社）によって二人の関係を見ることにする。

明治三十九年（一九〇六）九月十四日付、八一書簡。「小生一身上の事を」書こうとした「小説」の構想、「友人諸君」の中に「（八）天弦御風等」とある。

明治四十年七月四日付には「相馬は先月糸魚川へ帰へりしよし、先日、高田まで腕車にてあひに行きしも、あふことを得ず。帰郷の途次には必ず立ちよるべしの約束あり。ひそかに之をまち居れり」とある。

また、長坂吉和『会津八一をめぐる人々』（一九八六・十一・「新潟日報事業社」）によると、御風は、八一に宛てて、「片山天弦（ママ）、楠山正雄、生方敏郎、野尻抱影たちと」一夕、箱根に遊び、「上京の機会を待っている」と書いているという。

なお、八一上京後の、明治四十三年十月八日付、伊達宛書簡には、「今夕会津君の下宿に相馬君と僕と三人集まりて旧を談ず。」―伸、「会津本人の所で、今片上君と共に無駄話を叩いている」―御風、という二人の手紙を同封している。

三、

早くから俳人小林一茶に関心を持っていた八一は、現在の上越市、板倉町針の有恒学舎の英語教師として赴任するが、そこは、長野県との県境、一茶の生地柏原に近い。

明治四十年（一九〇七）―針村へ赴任した翌年―には、「信州柏原」の「一茶を弔」っており、翌年には「本日はからずも、彼が在京時代の自筆日記を獲て非常なる歓喜をひき起申候」（伊達宛八一書簡、明治四一・一・一七）と書いている。新井の醸造業入村四郎宅で「六番日記」を発見したのである。

それには、従来知られていない句、未発表の句が二千五、六百もあり、それによって、一茶の句が、一挙に倍加するという、研究史上の大発見である。

そのため八一は、この「日記」の校訂に専心し、「故人の為めに一茶俳句集の最も完璧なるものを編し、後世に伝へ度」（市島春城宛八一書簡、明治四一・六）いと考えた。

『秋艸道人、会津八一の生涯』（植田重雄、昭和六三・一・三〇・恒文社）によると、八一は、校訂、整理した「原稿」を「虚子に托してしまった」のだという。

その後が、今回公開の、伸の八一宛書簡に続く。

前述したように、八一の原稿は、な